

中学から大学まで、伸び伸びと 過ごせた愛知淑徳での10年間。

1905年に愛知淑徳女学校が誕生してから70年目の1975(昭和50)年、学園は念願の4年制大学を開学します。当初は文学部(国文科と英文科)のみの女子大でしたが、徐々に学部も増加。学園創立90周年の1995(平成7)年には、大学は男女共学体制へと大きく舵取りします。卒業生に学園の思い出を語っていただくシリーズの第18回は、女子大時代の国文学科卒業生、中澤たま美さんに登場していただきました。

シリーズ 18 百周年を迎えて



愛知淑徳大学文学部国文学科第15回卒業生
(平成4年度卒業)
中澤たま美さん(旧姓:外山)

昭和45年生まれ。現在39歳。
卒業後、旭化成ホームズに入社。平成15年、2級ファイナンシャル・プランニング技能士(国家検定)を取得。趣味は旅行で、海外へは年に1~2回、国内へも数回出かけている。スペイン、スイス、金沢などがお気に入り。卒業後も仲のよかった同級生10人ほどとよく会い、交流を続けている。

小学生の時、いとこの何人かが愛知淑徳に通っていて、親戚から、「淑徳なら、大学まで教育機関が整っていて、受験勉強をする時間の代わりに、好きな勉強やスポーツに打ち込むことができ、ゆったりとした気持ちで学生生活を送れるわ」と聞きました。両親から「あなたも、淑徳でお世話になったらどうか」との奨めもあり、受験することになりました。

入学してからはソフトボールに明け暮れました。高校1、2年の時は国体に出させていただき、3年生の時はインターハイで準優勝。6番でサードを守っていました。勉強とクラブとの両立は大変でしたが、結果を残せたのはよかったです。その時の仲間とは、今でも親友として

交流を続けています。高校を卒業する頃はバブルの時期で、短大を出て就職を希望する同級生が多かったのですが、私は中高とクラブばかりの生活でしたので、大学は四大を希望しました。国文学科を選んだのは、読書や本の作品の舞台を巡る旅行が好きだったからです。当時、愛知淑徳高校の卒業生の7割は、淑徳大学、淑徳短大へ進学をしていました。

入った頃の長久手キャンパスは、校舎もまだ少なく周囲は山ばかりでした。国文学科は1学年100人ほどで、ほとんどが顔見知りでした。授業によつては30~40人ということもあり、授業は高校のようでしたね。大学にはソフトボール部がなかったの、興味のあったバドミントン部

に入部しました。こちらは打ち込むというより楽しんでやっています。学園祭ではクラブから焼きそばの模擬店を出し、みんなで頑張って売りました。社交ダンス部の友人もドレスを着て売るのを手伝ってくれて、女子大ならではの華やかな学園祭だったと思います。

ゼミはクラブの先輩に勧められて、尾崎士郎(吉良町出身で「人生劇場」が有名が専門の都築久義先生(現在、副学長)のゼミに入りました。友人たちと一泊二日で吉良町の尾崎士郎のゆかりの地を回りました。卒論のテーマは「人生劇場」で、主に図書館で書きました。大学の図書館は当時できて5年ほどと新しく、学習スペースも広くて、明るく気持ちいい空間でしたね。

4年の終わりにはクラブの友人

と2人、バックパックを背負ってヨーロッパを2か月間回りました。当時はまだ卒業旅行は珍しく、両親からは猛反対されましたが、「淑徳魂」(笑)で何とか説得。もちろん卒業式の前日にはちゃんと帰国しましたよ(笑)。

就職活動を始めたのは4年生の5月くらいでした。もうバブルはじけていたと思いますが、就職課の方々の丁寧な指導をいただいたおかげで無事、住宅メーカーへ早期に決まりました。大変感謝しています。その頃は女性は3~5年お勤めしたら結婚という時代でしたが、良い上司や同僚に恵まれ、今も続けさせていたいただいております。

仕事は住宅ローンや税務関係などの相談業務に当たっています。お客様へ営業を通じて提案したライフプランなどを喜んでいただき、ご契約が決まった時などは、とても嬉しくやがいが感じます。

淑徳では中学の頃から、「どんなことでも一生懸命、あきらめないで頑張ること」や「女性としてのたしなみやしつけ」について、厳しくご指導いただきました。それは今でも仕事や生活の中で活かされています。淑徳では中学から大学までの10年間、本当に伸び伸びと、ゆとりある有意義な学生生活を過ごせたことに感謝しています。(談)



ゼミの都築先生を囲んで。卒業式は体育館で行われた



長久手キャンパスの正門前で。1号館棟まで広々とした空間が広がる



高校2年生の時、所属していたソフトボール部がインターハイで第3位に。「入賞おめでとう」の文字は、友人のお父さんが書いてくれた